

Title	サイファーパンク・ハムレット : 諜報, 暗号, コミュニケーション
Author(s)	中村, 未樹
Citation	大阪外国語大学論集. 29 p.139-p.149
Issue Date	2003-09-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79922
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

サイファーパンク・ハムレット
－ 諜報, 暗号, コミュニケーション－*

中 村 未 樹

**Cypherpunk Hamlet:
Intelligence, Codes, and Communication**

NAKAMURA Miki

Synopsis

In this paper I aim to analyse *Hamlet* (1601) referring to the two contexts—a modern information society and the Elizabethan “intelligence” society. These societies, despite a difference of time, have a couple of problems in common: security and privacy. The former concerns with government, which endeavors to monitor all communications and establish “an open society” in order to forestall the acts of hackers and terrorists. The latter has to do with people who are forced to live under the surveillance of government. *Hamlet*, as a spy story, deals with the two problems by dramatizing an information war between Claudius and Hamlet.

Claudius, owing to his murder of the former king and adultery with Gertrude, finds it necessary to survey and control information so as to maintain the security of his state. Checking information and public speech are routine for him. Regarding a transformed Hamlet as a suspicious figure, Claudius establishes a secret service, Elsinore Intelligence Network (EIN), and moves his spies to decipher as well as monitor Hamlet.

On the other hand, Hamlet grasps a new king's secret in his clandestine communication with the Ghost. Afterwards, what matters for him is a protection of this information and his intention from enemy spies until the time of revenge. To protect information and maintain privacy, Hamlet uses riddles strategically in his conversation with the members of EIN. I would like to say here that his words are codes, or, to borrow Francis Bacon's phrase, “Cyphars of Words.” With the use of codes Hamlet breaks the communication with EIN and hampers their acts of deciphering. Hamlet is a cypherpunk who protects privacy with cryptography.

The information war between Claudius and Hamlet comes to its highlight in Act 3, Scene 2, where Hamlet attempts to communicate with the king by way of the play within the play. He sends information—the secret of the murder and his desire to kill the king—to Claudius, who receives it with an unsettled behaviour. At this point their communication succeeds.

All the characters in the play are faced with some peculiar situation: the authentication crisis.

The world of espionage makes it difficult for people to ascertain the identity of an information sender. There is always a possibility, and a fear, of “simulation,” or impersonation. This is a characteristic symptom of both a modern information society and the Elizabethan intelligence society.

With the death of Claudius and Hamlet in the final scene, the secret of the murder of Hamlet Sr. remains unrevealed. Hamlet asks Horatio to disclose the secret as a spokesman. However, it is probable that a new king will alter Horatio's information in order to justify and legitimate himself. A renowned military man as he is, Fortinbrass also will join the intelligence society as its member. In the end, the information control will be repeated in the Fortinbrass regime, too.

Governments keep a lot of secrets from their people. . . . Why aren't the people in return allowed to keep secrets from the government?

–Phil Zimmerman¹

高度情報化の進む現代社会においては、情報管理をめぐる様々な問題が浮上している。政府のコンピューターに不法アクセスを試みるハッカーたち、あるいは暗号を駆使して秘密情報をインターネット上で伝達するテロリストたちの存在は、各国の政府にとって大きな脅威となっている。彼らの活動は、必然的にセキュリティ対策の重要性を政府に認識させることとなった。（「セキュリティ」という語は情報保護、そして国家の安全確保という二つの意義で用いる。）例えばアメリカ合衆国は、1952年にNSA（国家安全保障局）をたちあげ、国家政策として情報の管理を行っている。その活動内容は国内外の通信傍受、及び情報の収集と分析である。また、暗号の使用、開発に規制を加えようとする方針も近年になって打ち出された（吉田 110-14, 212）。こうして、アメリカにおいては、全てを open にしようという試みが着々と進行し、まさに国家的監視体制が確立されようとしている。

一般市民にとって、このような国家の動向が決して歓迎しうるものではないということは確かであろう。何故なら、彼らの交信は全て筒抜けとなり、その行動もモニターされているのだから。彼らの privacy は否応なく否定されてしまうのだ。こうした危機に対応するため、インターネット上における privacy 保護を訴える活動家たちが 1990 年代になって登場した。その名は cypherpunk。熟練したコンピューターエンジニアたちから構成されるこの集団は、政府の暗号規制に果敢に異議を唱えている。

Privacy is necessary for an open society in the electronic age. . . . Privacy is the power to selectively reveal oneself to the world. . . . Privacy in an open society also requires cryptography. If I say something, I want it heard for whom I intend it. If the content of my speech is available to the world, I have no privacy. . . . We are defending our privacy with cryptography. . . . Cypherpunks deplore regulations on cryptography. (Hughes 285-86)

このマニフェストによれば、「開かれた社会」においては暗号技術 (cryptography) が privacy 保護のための強力な手段となるのである。暗号は秘密のやりとり, communication を可能にするのだ。こうして cypherpunk たちは、その名のとおり暗号を「武器」にしてアメリカ政府の監視体制に正面から対抗しようとしている。

現代情報社会における諸問題をここで要約するなら、政府にとってはセキュリティ、一般市民にとっては privacy ということになる。両者の争点となるのは暗号であり、その利害の対立は cypherpunk の登場によってにわかには表面化されることとなった。筆者がここで主張したいのは、こうした状況が他ならぬエリザベス朝社会においても同様にうかがえる、ということなのである。もちろん、現代の情報社会はデジタル化というテクノロジーに基づいており、技術的相違は歴然としてあるのだから、アナクロニズムは意識しておかなければならない。だが、そこで表われている問題は、基本的には変わっていないのである。言葉をかえれば、「形式」は変わったが「内容」に変化はないのだ。

16 世紀のヨーロッパにおいては、イタリア、スペイン、フランス、そしてイギリスが相次いで諜報機関を設立し、国家間の、そして国内での情報をめぐる争いが繰り返されていた。各国のスパイたちは情報獲得のために暗躍し、また “the battle between cryptographers and cryptanalysts” (Singh 29), つまり暗号をめぐる競争も密かに進行していた。そんな中、1590 年 3 月、フランス諜報機関の一員である数学者 François Viète がスペインの機密文書の解読に成功する (28)。この事件は当事者であるスペイン国王 Philip 2 世のみならずヨーロッパ全土を震撼し、各国はセキュリティ対策の重要性を強く認識することになった。こうして、エリザベス朝社会は、情報の獲得、そして隠匿をめぐる争いが激化する「諜報社会」へと変貌していくのである。

同時代人の証言をここで拾っていくことにしよう。彼らの言葉は、諜報社会における特有の心境を物語っている。まず、Francis Bacon。彼は英国諜報機関と深く関わりをもち、政府のために暗号開発に取り組んでいた。Bacon はその書 *The Advancement of Learning* においてこのように述べている。“This art of ciphering hath for relative an art of deciphering... the greatest matters are many times carried in the weakest ciphers.” (131) Bacon がここで強調しているのは、暗号化は暗号解読という行為と相関するのであり、敵に読まれる可能性を踏まえた上で文書を暗号化しなければいけない、ということである。暗号技術を熟知している彼にとっては、引用後半部で彼が嘆いているように、情報のセキュリティこそが第一の課題であり、また絶えざる懸念でもあったのだ。

次に、Scotland 王 James 6 世の *Basilicon Doron* の中の一節を参照しよう。

[T]here is nothing so couered, that shal not be reuealed, neither so hidde, that shall not be known; and whatsoever they haue spoken in darknesse, should be heard in the light. (Sommerville 3)

この本が書かれた 1599 年頃、彼はイギリス王位継承に向けて Essex 伯爵と暗号による交信を密に行っていた (Plowden 125)。James は自分たちの communication が女王のスパイによって監視、さらには傍受されているかもしれない、という不安を抱いていたにちがいな

い。彼も、全てが露見されてしまう「開かれた社会」において privacy を維持することの困難さを痛切に感じていたのだ。

Hamlet(1601) は、まさにこうした社会的文脈の中で書かれたのである。そして、Mark Thornton Burnett が指摘するように、エリザベス朝の諜報社会と密接な関係性を持っているのである (37)。おそらく劇作家シェイクスピアは、彼特有の洞察でもって、スパイ活動の演劇性、あるいは演出的効果を看取したのだろう。実際、劇の主軸となっているのは、Hamlet と Claudius の情報をめぐる争いである。また、付け加えておけば、*Hamlet* というタイトルは、種本である Saxo Grammaticus のデンマーク物語の主人公 Amleth の文字を入れ替えたものである。彼はタイトルから「転置式暗号」(transposition cipher; Haynes 23) を用いるという「仕掛け」を行っているのだ。現代情報社会とエリザベス朝の諜報社会—この二つの文脈に作品を位置付けることによって、本論ではスパイ劇としての *Hamlet* の新解釈を試みる。

まずはじめに、劇世界 Denmark の政治的状況を確認しておこう。1 幕 2 場において、Claudius を国王とした新体制が誕生する。新国王 Claudius は先王 Hamlet を毒殺して王位を奪ったのだが、問題なのは彼がこの件に関して偽りの情報を流したことである。先王の亡霊は次のように語っている。

'Tis given out that, sleeping in my orchard,
A serpent stung me. So the whole ear of Denmark
Is by a forged process of my death
Rankly abused. (1.5.35-38)

Claudius は王が蛇に噛み殺されたという「偽情報」(a forged process)、嘘でもって国民を騙したのである。

以降、Claudius は「王殺し」という秘密を隠し持つことになる。この秘密の隠匿、言い換えれば情報のセキュリティに、彼の権力構造の安泰／セキュリティがかかっているといえよう。また、彼は兄嫁である Gertrude との結婚、つまり近親相姦というスキャンダルもおかしている。この二つの要因から、Claudius は、人々の噂、世論に対して絶えず敏感にならざるを得なくなる。実際、彼は劇中絶えず臣下、そして民衆の意見を気にしている。情報のチェックが新国王の課題となるのだ。そして、彼のもう一つの課題は、広報である。最初の演説において、Claudius は臣下を前に、自分の即位と結婚について弁明を試みている。また、劇後半部において、Polonius 殺害事件に直面した彼は次のように嘆く。“Alas, how shall this bloody deed be answered?” (4.1.16) Polonius の死を悼むよりも、この件についてどう人々に釈明するかについて国王は懸念するのだ。こうして、Claudius は、即位とともに情報チェックと広報を第一とする情報管理体制を整えていく。

一方、主人公 Hamlet は、先王の亡霊と密かに交信を行うことになる。亡霊は守衛たちの前に何度か姿をあらわすが、呼びかけに対しても沈黙したままである。両者の間に communication は成立しないのだ。そこで、亡霊の目撃者の一人 Horatio は、Hamlet に次のように言う。“It beckons you to go away with it, / As if some impartment did desire to you

alone.” (1.4.58-59) 亡霊は、Hamlet との “impartment”，つまり communication を要求しているのだ。果たして、Hamlet は闇夜の中で亡霊との communication を試みることになる。両者の交信後の場面を見てみよう。

Hamlet Never to speak of this that you have heard,
 Swear by my sword.

Ghost Swear.

Hamlet Well said old mole, canst work i'th'earth so fast? (1.5.159-62)

ここで、Hamlet が亡霊を “mole” と形容していることに注目したい。“mole” とは諜報員を指す隠語である。² 亡霊は秘密情報を伝達 (impart:1.2.207) するスパイなのだ。(‘impart’ という語は劇の重要なキーワードである。) その情報とは自らの死の真相であり、彼は Claudius の流した偽情報の訂正を行う。こうして、Hamlet と亡霊との impartment (communication) が成立する。

また、引用部の最初にあるように、Hamlet は Horatio たちに「誓約」(swear) を要求し、亡霊に関する秘密を共有する仲間として結束することになる。ここで参照しなければいけないのは、1584 年、英国諜報機関の指導者 Francis Walsingham の先導で行われた「連合盟約」(the Bond of Association) である。彼は、女王エリザベスの暗殺未遂事件が多発する中で、女王が暗殺された場合その実行者に復讐することを旨とする誓約を貴族たちと行い、秘密結社を創設した。以下がその条文である。

We and every of us... do voluntarily and most willingly bind ourselves, every one of us to the other, jointly and severally in the band of one firm and loyal society... pursue and offend, as well by force of arms, as by all other means of revenge, all manner of persons.... (Howell 1162)

誓約、秘密結社 (society) の創設、そして復讐 (revenge) —この一連のパターンは、*Hamlet* においてパロディ的に反復されていくことになる。これまで、ハムレットの行動は復讐劇という文学ジャンルの観点から語られることが多かったが、こうした政治的文脈との意外な関連性があるということを忘れてはならない。

国王の秘密—現体制を転覆しうるトップ・シークレット—を知った Hamlet にとっては、どのようにこの情報を公けにするか、つまり情報公開が以降の問題となる。何故なら、国王である Claudius に対する復讐という行為は、何も知らない人々には謀反とみなされてしまうのだから。(実際、最終場で王を剣で刺した Hamlet に対し、人々は “Treason, treason!” (302) と叫んでいる。) 復讐の正当性は情報公開によってのみ保証されうなのだ。また、付け加えておくならば、種本の Saxo の物語においては、王殺しは公然の事実となっている (Edwards 1)。それに対して、*Hamlet* においては、秘密情報としての王殺しが、Claudius と Hamlet のスパイ合戦を稼働させる原動力として機能しているといえるだろう。Denmark 宮廷における power politics は、とりもなおさず information politics、つまり情報をめぐる争いとして立ち表われるのだ。

両者の諜報戦の様をここから確認していこう。2 幕以降、奇怪な行動をとる Hamlet に対

し、Claudius は疑念を持つ。いや、むしろ Claudius は、Hamlet が狂ったと囁きあう人々の噂、情報に不信感を抱いているといえる。彼は disinformation (偽情報) の可能性を見抜いているのだ。これは情報の信頼性にこだわる Claudius ならではの反応だろう。彼は全ての真相 (“truth”; 2.2.156) を知らなければ気が休まらないのである。むろん、その背後に彼の罪悪感が働いていることはいうまでもない。“So full of artless jealousy is guilt...” (4.5.19) と Gertrude が述べているように、罪悪感 (guilt) が不安 (jealousy) を生み出すのだ。果たして、Claudius は Hamlet の監視・解読のための諜報機関を即座に編成することになる。以下ではこの諜報機関を Elsinore Intelligence Network (EIN) と呼ぶことにする。

EIN を指揮するのは Claudius であり、時には彼自らが “Lawful espials” (3.1.32), つまりスパイとして Hamlet と Ophelia の会話を盗聴している。Elsinore においては communication の privacy は絶えず脅かされているのである。“What is between you?” (1.3.98) という Polonius の言葉が示すように、「間」に入って情報を傍受しようとするスパイたちが舞台に遍在しているのだ。

それでは、EIN のメンバーを紹介していこう。まずは、“the father of good news” (2.2.42), つまり情報収集の元締めとなる Polonius。そして、実地に情報を収集する末端スパイとして、Hamlet の恋人 Ophelia と親友の「スポンジ」(a sponge; 4.1.12) コンビ、Rosencrantz と Guildenstern。こうしてみると、Claudius は Hamlet と懇意の者を自分の側に寝返らせ、二重スパイとして活用していることがわかる。巧妙に言葉を駆使しながら、彼は部下たちを情報収集へと走らせる。

[T]o gather

So much as from occasion you may glean,
Whether aught to us unknown afflicts him thus,
That opened lives within our remedy. (2.2.15-18)

Claudius は (自分の秘密以外の) 全てをオープンに (opened) しようと試みる。こうして Denmark はまさに「開かれた社会」へと変貌していくのだ。³

ここで、EIN のメンバーたちが、それぞれ異なる思惑をもって動いているということを強調しておきたい。⁴ Polonius の場合は、王への追従もさることながら、その詮索好きな性質が大きく関与しているだろう。⁵ Ophelia は、半ば強制的にスパイ・ゲームの一員に仕立て上げられる。だが、別の観点から見れば、彼女は Hamlet への関心・愛情ゆえに、王のスパイ作戦にしたたかに便乗しているともいえよう。そして、Rosencrantz と Guildenstern を特徴づけるのは野心である。彼らは Hamlet の情報を抱えて、王に売り込みに行くのだ。そもそも、Claudius の宮廷は、情報提供によって昇進が約束される情報市場にほかならず、そこでは Hamlet の個人情報が高く売れるのだ。情報は、利益なのである。結果的に、王と二人の主従関係は情報の売買契約として成立することになる。Claudius は情報のためのコストを惜しまない。この点において、彼はエリザベス朝の secret service の指揮官 Walsingham のモットー、“knowledge is never too dear” (「情報は決して高いということはない」; Plowden 105) の忠実な実践者であると言えよう。

EIN のスパイたちによる包囲網—このような状況が、Hamlet の以降の情報戦略を形作っていく。⁶ 彼にとっては、スパイたちの監視の中で、復讐、そして情報公開の時まで亡霊から得た秘密情報と自らの企図をいかに隠匿するか、ということが問題になる。言い換えれば、privacy 保護が彼の課題となるのだ。そもそも、Hamlet というキャラクターを当初から特徴付けているのは、その強い privacy 意識である。Hamlet 解説に失敗した Guildenstern は、王に次のように報告する。

Nor do we find him forward to be sounded,
But with a crafty madness keeps aloof
When we would bring him on to some confession
Of his true state. (3.1.7-10)

Hamlet は EIN のスパイたちに対しては、自らの心中を明かさない。彼はその“true state”を彼らに伝えることはないのである。Hamlet は意図的に、彼らとの communication を遮断しようとするのだ。そして、その際に Hamlet が用いるのが、謎めいた数々の言葉なのである。彼に付きまとう Guildenstern に対して、Hamlet はこのように言い放つ。“I am but mad north-north-west. When the wind is southerly, I know a hawk from a handsaw.” (2.2.347-48) この言葉に、Guildenstern は反応することができない。Hamlet の言葉は、その場での安直な理解を不可能にする riddle なのだ。それは、この台詞の意義をめぐる長年繰り広げられてきた解釈の歴史が証明している。⁷ Claudius もまた同様に Hamlet との会話においてこの苦境に陥ることになる。

Claudius How fares our cousin Hamlet?
Hamlet Excellent i'faith, of the chameleon's dish: I eat the air,
Promise-crammed. You cannot feed capons so.
Claudius I have nothing with this answer Hamlet, these words are not mine.
(3.2.82-86)

Claudius は、自ら打ち明けているように、Hamlet のあてこすりを含んだ言葉を理解できない。実際、彼の台詞を即座に把握することは、劇場の観客たち、そして私たちにとっても容易ではなかろう。Hamlet と Guildenstern、そして Hamlet と Claudius—このどちらの場合とも communication は成立していないといえる。高橋氏の適切な表現を借りるならば、Hamlet は「語ったけれど、語らなかったに等しい」(12) ののである。

communication という側面において、Hamlet は自分が伝えたい (impart) 情報の受信者を意図的に限定しようとしているようだ。彼は、一部の人間にのみ理解しうる、秘密の communication を試みているのである。論文の冒頭で引用した Hughes の言葉を使うならば、“selectively reveal oneself to the world”が Hamlet の情報戦略の要なのである。その典型的な例が、劇中劇を指して彼が使う“the mousetrap” (3.2.216) という言葉であろう。この比喩は、暗号学的に言えば code、また Bacon による分類に従うならば“Cyphars of Words” (*De Augmentis* 80) である。⁸ この code は、事情を知っている観客だけが、「王に対して仕掛けられた罠 (trap)」であると解説できるだろう。この場面では、Hamlet と観客との間におい

て密かな communication が成立するのだ。こうしてみると、彼の1幕2場における言葉、“I am too much i'th'sun” (1.2.67) も同様の機能を果たしていることが分かる。この台詞に、やはり Claudius は反応することができない。Hamlet の言葉は、王をすり抜けて観客へと向かうのであろう。そこでは、“sun”=“son” という code を解読できる観客のみが、Hamlet の複雑な心情を十全に理解しうるのだ。これらの秘密の交信によって、Hamlet は観客の共感を得るとともに、Claudius をはじめとする第三者への不満・反感を密かに吐露することが可能になるのである。その際に彼がある種の精神的開放もしくは気晴らしを経験しているのはまちがいない。

Hamlet の言葉は劇における大きな謎であるが、ここでは彼の言葉を、隠された意味内容をもつ code (Cyphars of Words) として捉えたい。彼はこの暗号を用いることによって communication の privacy を確保するのだ。こうして Hamlet は、暗号を使って privacy を保護する、エリザベス朝における cypherpunk へと変貌する。

Hamlet は自らの個人情報、“my mystery” (3.2.330) を隠匿しつつ、逆に EIN のメンバーたちの正体を次々と暴いていく。Ophelia、そして Guildenstern と Rosencrantz は皆二重スパイとしてつるし上げられるのだ (3.1.126-43, 4.2.9-11)。結果的に、Hamlet は EIN を脅かす危険分子として徐々に認知されていく。

こうして、劇において、中央集権的監視体制とサイファーパンク・ハムレットの対立の構図が出来上がる。ここで、どちらの側もある種の不確かさを抱えているということを述べておかねばならない。Hamlet は、亡霊の正体について確信が持てない。彼は亡霊が父王になりすました“devil” (2.2.552) かもしれない、と考えるのである。情報の送信者の authentication、つまり「認証」という問題に彼は直面しているのだ。この点については後から詳しく議論することにする。一方、Claudius は、Hamlet の持つ情報、“something in his soul” (3.1.158) の内実について未だ確証を得ていない。EIN の解読はことごとく阻止されたのだから。そのため、Claudius は絶え間ぬ不安-自分の秘密を知られているのかもしれないという不安-に苛まれることになる。結果として、Hamlet と Claudius の探りあい、スパイ合戦は膠着状態におちいることになる。

この状況を打ち破るのが、劇中劇である。Hamlet は、ここでは意図的に王との communication を試みる。王殺しを再現することによって、亡霊から聞いた情報、そして自分の意図を Claudius に密かに伝達 (impart) するのだ。そして、この場面では、Hamlet が逆に王を監視することになる。Hamlet は Horatio に言う。“I mine eyes will rivet to his face.” (3.2.75) だが、王を監視しているのは、この二人だけではないだろう。おそらく、劇場の観客たちも、二人に倣って王の挙動に注目しているはずだ。こうして、劇場全体がモニタリングの空間に変容することになる。スパイ活動の演劇性は、ここで視覚的に実証されるのだ。果たして、Claudius はこの劇に動揺し、また Hamlet (劇中劇における “nephew to the king”) からのメッセージ(殺意)を理解する。Hamlet と Claudius の水面下での communication が成立するのだ。二人は互いの秘密を知ることになり、また両者ともに、相手に対する疑念は確信へと変わる。

その後、自分の秘密の暴露（情報公開）を恐れる Claudius は、Hamlet の国外排除と殺害を計画する。“The terms of our estate may not endure / Hazard so near us as doth hourly grow / Out of his brow.” (3.3.5-7) 情報、そして国家の security は危機 (hazard) に瀕しているのだ。それに対して、Hamlet は王の英国に宛てた手紙を傍受し、その書き換え (Rosencrantz たちの処刑の発注) を行う。王の嘘には嘘で対抗するのだ。Hamlet は王の名を騙って署名し、また王の ID (王璽) を無断使用することによって、まんまと Claudius に「なりすまし」のである。ここで、エリザベス朝の英国諜報機関のスパイたちが、しばしばこの「なりすまし」のテクニックを使用していたことを付記しておこう。関係者 Bacon の言葉を使うならば、“simulation” (Essays 13) は諜報社会に特有の自己成型の mode だったのである。

現代社会におけるインターネット上での「なりすまし」の原型ともいえるこの simulation は、劇世界にひとつの波紋を引き起こす。simulation によって、情報発信者の正体をめぐる混乱が生じるのだ。劇に特徴的なこの状況を、ここでは「認証の危機」(the authentication crisis) と呼ぶことにする。実際、劇においては、皆発信者確認の作業に追われている。ここでは、“unfold yourself” (1.1.2), つまり「正体を明かせ」という問いかけが繰り返されるのだ。Hamlet の場合は、先程述べたように、亡霊の正体について疑念を抱いていた。そのことが彼の復讐の遅延の一因ともなっていたのである。また、劇の前半では、Hamlet が Ophelia に宛てた手紙に対して、Gertrude は次のように言う。“Came this from Hamlet to her?” (2.2.113) 彼女は、その手紙が本当に Hamlet が書いたものなのか、即座に確認するのである。さらに、4 幕 7 場において、死んだはずの Hamlet から届いた手紙に、Claudius は疑念をもたざるをえない。

Claudius What should this mean? Are all the rest come back?

Or is it some abuse, and no such things?

Laertes Know you the hand?

Claudius 'Tis Hamlet's character. (46-49)

王はこの手紙が何者かによる「偽造」(abuse) と考え、筆跡鑑定に取り組むのである。このように、「認証の危機」においては、情報発信者の不確かさ、そして「なりすまし」への不安が生じる。これは、諜報社会、言い換えればスパイの暗躍する「simulation の世界」に特有の症候と言えるだろう。Hamlet の “We are arrant knaves all, believe none of us” (3.1.125-26) という言葉は、この世界における処世術的な教訓として響くのである。また、こうしてみると、Hamlet が Ophelia, Horatio, そして Claudius に宛てた手紙に、必ず自らの名を署名しているのは、世間を席卷する「認証の危機」に対する彼の遊び心の表れなのかもしれない。

4 幕 5 場において、暴徒化した民衆が Laertes の先導のもとに宮廷におしかける。“Choose we! Laertes shall be king.” (106) Claudius が絶えず恐れていた、そして抑えようとしていた世論 (“whisper”; 4.1.41) が、ここで噴出するのだ。だが、王は、指導者 Laertes との秘密会談において、復讐心に燃える彼を EIN のメンバーとして勧誘することに成功する。Hamlet の復讐には、また別の復讐でもって Claudius は対抗するのだ。

劇終幕では, Claudius, そして Hamlet は共に死に, Fortinbrass が Denmark 王位に就くことになる。王殺しという秘密が一般には依然として公開されないまま劇は終わるのだ。Hamlet は情報公開を秘密結社の一員 Horatio に託す。

O God, Horatio, what a wounded name,
Things standing thus unknown, shall live behind me!
If thou didst ever hold me in thy heart,
Absent thee from felicity awhile,
And in this harsh world draw thy breath in pain
To tell my story. (5.2.323-28)

こうして, Horatio はその名のとおり「語部」, スポークスマンとして広報の任務につくことになるのである。

では, Fortinbrass による新体制において, Horatio の情報はどのように扱われるのであろうか。新国王は, かつて Denmark 侵略未遂事件を起こしている。またその王位継承にしても, Hamlet の推挙はあるにせよ不自然さは否めない。⁹ これらの点を踏まえた場合, Fortinbrass が Horatio の情報を改竄する可能性は極めて高いように思われる。ここで, 仮に *Hamlet* の続編を想像するなら, それは Claudius の時と同様に Fortinbrass の弁明から始まるにちがいない。新国王にとっては, これまでの事件のいきさつを正確に伝える (impart) ことよりも, 外国人である自らの即位の必然性, 正統性を主張することがその際の第一の課題となるであろう。そこでは, Hamlet の復讐という行為は, 美談ではなく, むしろ Denmark 王家の内紛あるいは不祥事として報告されるのかもしれない。Hamlet の願いも空しく, 彼の “wounded name” は歪んだ形で後世に伝えられるのだ。つまり, Claudius に倣って, Fortinbrass も自らの正当化のために世論操作を行うことになるのである。こうして, 私たちは, 軍人 Fortinbrass の諜報家への意外な変貌を目撃することになるかもしれない。彼も諜報社会 Denmark の一員として仲間入りするのである。¹⁰ 結果として, 新体制においても, 情報管理問題は反復されていくのである。

* 本論は日本英文学会第 74 回大会 (於 北星学園大学) における口頭発表に加筆・修正したものである。

Notes

- 1 qtd. in Kippenhahn 197.
- 2 *OED* mole 2.c.
- 3 Michael Almereyda 監督の映画 (2000 年) においては, Denmark 宮廷はマルチメディア会社へと姿を変え, そこではモニターカメラが常時作動している。また, Polonius は Ophelia に小型マイクを付けさせて, 彼女と Hamlet の会話を盗聴する。劇世界を現代の監視社会と関連付けた点において, この脚色は本論における分析と方向性を一にする。監督自身の言葉を引用しておこう。
“The chief thing was to balance respect for the play with respect for contemporary reality—to see how thoroughly Shakespeare can speak to the present moment, how they can speak to each other.”
(Almereyda ix)

- 4 ここで Gertrude について触れておかねばならない。彼女は夫 Claudius と息子 Hamlet の諜報戦の狭間に立たされているが、その実情、また自らの置かれた状況については何も知らない。結果的に、両者を取り持とうとする彼女の対応は naive な印象を与えるばかりである。だが、3 幕 4 場における Hamlet との対話において、彼女はその内容を口外しないことを誓う。この秘密の communication を経ることによって、彼女は諜報戦の一員となるのだ。
- 5 Polonius は留学中の息子 Laertes の偵察を家来に行わせている。家庭内においても彼はスパイ作戦をコミカルに繰り広げるのだ。
- 6 “Denmark’s a prison” (2.2.234) という Hamlet の言葉に注目したい。エリザベス朝においては、情報収集のため意図的に牢獄に入るスパイ、いわゆる “prison informer” (Plowden 113) が存在した。スパイの遍在する状況を踏まえた上で、彼はこのような形容を用いているのかもしれない。
- 7 Takahashi and Kawai 395-96 を参照。
- 8 “code” については以下の定義を参照。“Technically, a *code* is defined as substitution at the level of words or phrases. . . . (Singh 30)
- 9 “As the play proceeds, an audience is bombarded with conflicting messages concerning the Danish monarchy, not one of which appears to be privileged. On the issue of succession, *Hamlet* prevaricates.” (Burnett 38)
- 10 軍人 Fortinbrass の登場に、観客たちは Claudius の諜報国家から先王 Hamlet の体現していた軍事国家への先祖返りを予期するかもしれない。実際、1999 年の Kenneth Branagh 監督の映画は、Fortinbrass を侵略者と位置付けることによって、そうした解釈を促している。

Works Cited

- Almeryda, Michael. Preface. *William Shakespeare’s Hamlet Adapted by Michael Almeryda*. London: Faber and Faber, 2000. vii-xii.
- Bacon, Francis. *The Advancement of Learning*. Ed. G. W. Kitchin. Philadelphia: Paul Dry, 2001.
- “De Augmentis Scientiarum.” *The Bi-literal Cypher of Sir Francis Bacon*. Ed. Howard Publishers. Michigan: Howard, 1910. 80-84.
- *The Essays or Counsels Civil and Moral*. Ed. Brian Vickers. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Burnett, Mark Thornton. “The ‘Heart of My Mystery’: *Hamlet* and Secrets.” *New Essays on Hamlet*. Eds. Mark Thornton Burnett and John Manning. NY: AMS, 1994. 21-46.
- Edwards, Philip. Introduction. *Hamlet, Prince of Denmark*. Cambridge: Cambridge UP, 1985. 1-71.
- Haynes, Alan. *The Elizabethan Secret Service*. Gloucestershire: Sutton, 2000.
- Howell, T. B. ed. *A Complete Collection of State Trials and Proceedings for High Treason and Other Crimes and Misdemeanors*. NY: William S. Hein & Co., 2000.
- Hughes, Eric. “A Cypherpunk’s Manifesto.” *The Electronic Privacy Papers: Documents on the Battle for Privacy in the Age of Surveillance*. Eds. David Banisar and Bruce Schneier. NY: Wiley, 1997. 285-87.
- Kippenhahn, Rudolf. *Code Breaking: a History and Exploration*. NY: Penguin, 2000.
- Plowden, Alison. *The Elizabethan Secret Service*. NY: St. Martin’s, 1991.
- Shakespeare, William. *Hamlet, Prince of Denmark*. Ed. Philip Edwards. Cambridge: Cambridge UP, 1985.
- Singh, Simon. *The Code Book: The Secret History of Codes and Code-breaking*. London: Fourth Estate, 2000.
- Sommerville, Johann P. ed. *King James VI and I: Political Writings*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- 高橋康也. 「語る／騙る／カタルシスー『ハムレット』へのノートー」『シェイクスピアリアーナ』8 (1989): 4-27.
- Takahashi Yasunari and Kawai Shoichiro. Notes. *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark*. Taishyukan, 2001. 388-416.
- 吉田一彦. 『暗号戦争』日本経済新聞社, 2002.

(2003. 6. 29 受理)